Chapter 12 : **下水の逆襲＆悪臭包囲戦 Part 2**

バンギラスのかつて清潔だった邸宅に悪臭が染み渡ると、最後の怒りの咆哮がダークマウンテンに響き渡った。

粉々になった便所の奥深く、恥とトイレの水に濡れた彼が震えながら立ち上がる。

「もう、俺は我慢の限界だ！！」

彼は巨大な爪でヤミラミとヨクバリスの首を掴み、ぐるぐると振り回してから、強烈な地震投げで空へとぶん投げた。その威力に、遠くを飛んでいたホウオウですら顔をしかめた。

二人のイタズラ者は同時に叫ぶ。

「またしてもぶっ飛ばされるぅぅぅぅーー！！」

ズドォォォンッ！

二人は遥か遠くの地面に激突し、ちょうどそこにいたニャースの真上だった。

「ぎゃああっ！？なんだこのニャース味の悪夢は！？」とニャースが衝撃で身を震わせ叫ぶ。

ヨクバリスは下水のソースと古いきのみの泥まみれで呻く。

「せめて、柔らかく着地したな…」

「俺の上にかよ、この毛玉クソマフィン野郎！」とニャースが怒鳴り、重さに四肢をばたつかせる。

そのすぐ隣で、ピカチュウはニャースに熱弁をふるっていた。

「頼むよ、何だろ？ただの500ポケドルだぜ。返せよ。前のきのみ賭博大会のあとに返すって言ったじゃないか」

バタッ。

ヤミラミが顔面からピカチュウに着地し、泥で汚した。

一瞬の静寂。

そして…

「なんで俺だけいつもこんな目に遭うんだ…」とピカチュウが呟き、目は虚ろで尊厳は粉々だ。

ヤミラミはふらふらと起き上がり、まだニヤリと笑う。

「おい…これは貸し借りの話し合いか、それとも家族の集まりか？」

泥とトラウマに半分埋まったピカチュウは呟いた。

「これだから電気タイプは誰にも尊敬されないんだよな…」

ヨクバリスはぐちょぐちょのマフィンを差し出す。

「友達になるか？」

「いいや！」とニャースが威嚇し、爪を剥き出しにして二人を追いかけた。

—

一方、バンギラスの邸宅では…

彼が業務用の強力な消毒液で家中を必死に磨いていた。

ゾロアークが通りかかり、顔をしかめてすぐに立ち去った。

「メモだ、次のイタズラは…奴らを軌道に打ち上げてやる」とバンギラスは低く唸った。